

# 大橋須磨子

長谷川時雨

青空文庫



霜月はじめの、朝の日影がほがらかにさしている。澄みきった、落附いた色彩いろと香かがあたりに漂い流れている。

朝雨にあらわれたあとの、すがすがしい空には、パチパチと弾はじける音がして、明治神宮奉祝の花火があがっている。小禽ことりが枝から飛立つ羽はぶきに、ふち紅べにの、淡い山茶花さざんかが散った。

今日中にはどうしても書いてしまわなければならないと思いがら、目のまえの一本か二本の草木をながめ、引窓からながめるような空の一小部分を眺めて、ぼんやりとしている。

けれど、秋の香かは、いつまでわたしをそのままにしておかなかった。菊のかおりが、ふと心をひくと、頭の底の方で鼓つづみの音ちようが丁

と響ききこえた。爽さわやかに冴さえた音は、しんと頭を澄ませてくれた。それにつれて清朗な笛の音も聞える。そして、湿やかに、なつかしみのある三味線の音もあつた。

ごしやごしやと、乱れた想おもいで一ぱいだったと思つた頭のなかは、案外からつぽだったと見えて、わたしは何時いつかよい気持ちになつて、ある年のある秋の日に、あの広々した紅葉館こうようかんの大広間にいて、向うの二階の方から聞えてくるものの音に、しんみりと聞き耽ふけつていたのが、いま目前に浮びあがつて、その音おんぎ曲よくの色い調ろねを楽しみ繰出している――

——ななつになる子が、いたいけなこと言た。とのごほしと唄う  
とうた……

かみがたうた  
上方唄の台広の駒にかかる絃は、重くしつとりと響いた。

こい毛を、まつくろな艶に、荒齒の毛すじあとをつけた、ほどの  
いい丸鬘まるまげに結つて、向うむきに坐つて三味線をひいている人が  
ある。すこしはなれたところに、色白な毛の薄い老女が、渋い着  
ものをきて、半分は後見役で、半分は拜見の心持ちで、坐つて  
いる。もう一人大柄な、顔もおおきい、年もかなりまさっている  
老女が、頭のまん中へちいさな簪かんざし巻まきを（糸巻きという結び  
かたかも知れない）つけて、細い白葛しろくずひ引きをぴんと結んで、し  
やんとした腰附きではあるが、帯をゆるくしめて、舞扇をもつて

立っている。

その傍に、小腰をかがめて媪おうなの小舞こまいを舞うているのは、冴々さえざえした眼の、白い顔がすこし赤らみを含んで、汗ばんだ耳もとから頬ほおへ、頬から頸くびの、あるかなきかのおしろいのなまめき——しつとりとした濡ぬれの色の鬢びんつき、銀杏いちようがえしに、大島の荒い一つ着ぎに黒くろ縷じゆす子の片側を前に見せて、すこしも綺羅きらびやかには見せねど、ありふれた好みとは異ひとっている女が、芸いきいにうちこんだ生いきい々きしさで、立った老女の方へ眼をくばっている——

——さてもさても和わごりよは、誰だれ人びとの子なれば、定家ていかかつらを——

京舞井上流では、この老女ものの小舞は許しものなので、人の

来ない表広間の二階の、奥まった部屋にこの四人は集っている。薄暗いほど欄間の深い、左甚五郎の作だという木彫のある書院窓のある、畳廊下のへだての、是真の描いた紅葉の襖をぴったり閉めて、ほかの座敷の、鼓や、笛の音に、消されるほど忍びやかに稽古をつけている。

立っている、糸巻きに鬘結んだ老女が、井上流の名手、京都から出稽古に来て滞留している京舞の井上八千代——観世流片山家の老母春子、三味線を弾いているのは、かつて、日清役のとき、威海衛で毒を仰いで死んだ清国の提督、丁汝昌の恋人とうたわれたおしかさん、座っている老女は、紅葉館創立以来のお給仕の総指揮役で、後見役のおやすさん。舞いをならっていた女

は、それらの人たちにとっては、客まとうど人でもあり、もすこし親しみのある以前の朋輩ほうばいでもあつた大橋夫人須磨子さんだつた。

美に対する愛惜——そうした分はつきり明した心持ちを知らなかつた時分のことではあるが、わたしはある日、呉服橋の中島写真館で、アルバムをくつてゆくうちに、一枚の写真の人物に引きつけられて、忘れられない美しい女ひとを目に残した。今から廿二、三年も前のことで、五、六人の美女にとりまかれて、もつとも美しい女が中央まんなかに立つて踊っている、そのひとだつた。星のような眼がすこし笑っていた。おんなじ連中で、歌がるたをとっているのもあつたが、わたしはどうした事か踊りの方にひきつけられていた。



そして中央の美人は、濃い髪を銀杏がえしに結つて、荒いかすり——その頃は漸くはやりだしたばかりだと思つた——大島紬つむぎを着て写つていた。

しかし、わたしはその人たちが何処どこの連中だか知らなかつた。知つたにしたところがその美しい人は、もう紅葉館の美姫としてではなかつた頃であろう。その後ほどなくわたしは竹柏園ちくはくえん先生のお宅の、お弟子たちの写真箱の中から、中島写真館で見出したみいだとおなじ人の、おなじ写真を見出した。

「この方は、どなたで御座いましょう、先生」  
わたしの声は悦びに額かぶえていたに相違なかつた。

「博文館の大橋さんの夫人です」

そう聞くと、その姿こそ見る時がなかったけれど、紅葉館でも勝れた美貌の女であったということだけは知っているので、なるほどそうかと、不思議に満足をした気持ちであった。

その後、近々と、この麗人を見る日が幾度かあった。ことに美しいと見たのは、もう三十幾つ——四十に近いと聞いていたが、ある年の晩春に、一重ざくらが散りみだれる庭に立った、桜さくらね鼠色ずみの二枚重がさねを着た夫人ぶりであった。いかな高貴の人柄というもはずかしくない、ねびととのつた姿で、その日は、貴紳、学者、令嬢、夫人の多くのあつまりであったが、優という字のつく下に、美と、雅と、婉えんと、いずれの文字をあてはめても似つかわしいのはこの人ばかりであると、わたしの眼は吸いつけられてい

た。金きん欄らんの帯が、どんなに似合ったことぞ、黒髪に鼈べつこう甲こうの櫛くしと、中差なかざしとの照り映はえたのが輝くばかりみずみずしく眺められたことぞ。わたしは、昔物語のなかの、なにがしの御息所みやすどころなどという藤ろうたげな女君めぎみに思いくらべていたりした。

出世たかを矯たかぶらない、下のものにも気の軽そうな気質は、ひとつこと一言ひことふたことふたことの言葉のなかにもほのめいて見られる。この人よりは顔も普通で、出世もさほどでない女さえ、我第一の器量人といったふうに振舞うのが多いのに、大橋家の家憲がそうしたのか、彼女の生れたちがそうなのか、立入って知らないが奥床おくゆかしいと思つた。近代的なひらめきはないが、そうしたところのないのが、しつとりとした落付たいけきのある、大家たいけの夫人としての品を保たせていた。

わたしはびったりとその女の胸むとに触れたことがないので、情の人か、理智の人かそれすら知らないが、伶俐りこうな人であることは言わずもがなであろう。

わたしの思出は、また紅葉館の、あの広々とした二階の一室へともどる——

台だい広びろの駒こまの、上方かみがたうた唄の三味線の音がゆるく響くと、涙がくゆってくるのであつた。わたしの妙に思いやりのある心は、そうしたおりに意地悪く、この幸運な女ひとと、向いあつて坐っている人の上に廻しずくつてゆくのであつた。聞きしみていた三味線の、絃いとの顫えから、雫しずくしてくるものが、妙にわたしの胸を一ぱいにさせるの

であつた。

長唄ながうたでも、富本とみもとでも、清元きよもとでも、常磐津とぎわづでも、おしかさんんは決して何処へでも負けはとらない腕利ききで、大柄な、年の加減ででっぷりして来たが、若い時分にはさぞと思われる立派な、派手な顔立ちで、京生れで言葉は優しいが、色はたいして白くはない。眉毛まゆげのくつきりしている髪の毛の実に好い女だつた。

紅葉館かようかんが明治十幾年かに創業のおりは、当今の女優気分と、カ  
 フェーきゆうじの給仕きゆうじ気分と、いにしへの太夫の気分とを集めたものへ、  
 芸妓の塩梅あんばいと、奥女中のとりなしとを加減して、そのころの紳  
 士の慰楽の園としようとした目論見もくろみで、お振袖ふりそでを着せて舞わせ  
 もし、またすつきりと水ぎわの立った粹いきな酌人も交ぜた。おさな

いものは稚児鬻ちごまげの小性こしょうぶりにしてしたてた。

家禄を返還した士族——旗本上りも、諸藩の家人けにんも馴なれない時世に口をぬらしかね、残してきたものも売りはらいきつてしまつた時分のこと、そうした人たちの娘が、多く集められ、京都からも多く連れてきた。むきむきの諸芸をしこんで出したので、あつぱれ紅葉館は時代に応じた、明るい華やかな、一種の交際場となつたのだつた。諸芸の取締り兼、酌のとりかたを教える師匠番によばれたのが、吉原よしわらの廓くわくからおよしさん（現在は某氏夫人である）と、品川から常磐津のおしよさんのおやすさんの二人。

その当時は、廿四、五だつた、色白の、すらりと身長の高い、薄菊石うすあばたのある、声の好い、粹なおやすさんが、もう六十五、六

になつて、須磨子さんの京舞を見ている。おしかさんも最早もはや古参株で、それらの老女の一、二人を除くと、動かせない中老どころだ。廿五年勤続の祝いも五、六年前に済んで、もうやがて五十路にも近かろう。

けれども、おしかさんもまだ水々した年増としまだ。四十を越したとは、思われない若やかさであったが、しかし、おしかさんと須磨子さんとの間には、十代の差があるように、その日の、光りの暗い襖ふすまのかげでは見えた。

玄関脇わきの小砂利こじやりの上には形かたちのよい自動車自動車が主人を送つて来て

控えている。その車の主こそ京舞の許しものを、昔のおしよさんの出京している間だけならいに通っている、芸ごとが好きなら須磨子夫人だった。番町の邸では、時折家族で——子供衆たちの催しではあろうが——大仕掛けなお伽芝居とぎが催されたり、藤間勘ふじまかんじゆ十郎うしろのお浚さいらいなどに令嬢の一人舞台上で見せられる時もあった。

おしかさんと須磨子さんとは、たしかおないどし生れで、踊り子のなかで、お絹、おまさにつづいて、美貌と上手であつた須磨子は、十八の盛りを大橋氏の手引きとられた。

明治文壇を硯友社けんゆうしゃの一派が風靡ふうびしたおりとて、紅葉館の女中の若い美女たちが、互いに好き好きの作者に好意を持つようになったのは、硯友社の尾崎紅葉氏おさきこうようが芝公園近くに生れて、その名



さえゆかりもあるというところから、意気もあい、当時の人気作家、花形の青年たちは、毎夜のように、紅葉もみじの襖ふすまの照り映はゆる、  
燈ともしび火のもとに集まったのだった。そんなことから、後に紅葉の傑作「金色夜叉こんじきやしや」が出ると、お宮はお須磨さんがモデルで、貫一は巖谷小波氏いわやさざなみだという噂うわさなども高かった。それよりも、美しさを妬ねたんでか、出世を呪のろつてか、俳優では幸四郎、お能の方では、京都の片山九郎三郎のと、とやかくと噂するものもあつたが、大橋家には家を起した賢夫人しゆうとめが姑としてあつたからには、そうしたロマンスは紅葉館の花形であつた美姫の、華やかな語りぐさに過ぎまい。情の港のとまり船、さまざま甘い、かなしい追憶の積つ荷みには、三味線をとって、お相手をして、地じを弾ひいているおしかさ

んの方にこそ、思いやられることが沢山にある。

おしかさんは数々の人に浅くはなく思われたが、みんなえにし  
が浅かった。支那の<sup>ていじょしょう</sup>丁汝昌が日本にいるうち、おしかさんの  
傍を離れかねていた。彼国へ帰ってから切々な思いは、あの英  
雄に断腸の文をしたためさせた。あの戦争が起つてからも、あわ  
れな提督はおしかさんを忘れはしなかった。その気持ちをしつて  
いるものは丁汝昌の心を察して、わたしにしみじみと語つてきか  
せたことがある。わたくしはおしかさんと<sup>ひざぐみ</sup>膝組みで、そうした恋  
のいきさつを聴いて、おしかさん一人について何時<sup>いつ</sup>か委<sup>くわ</sup>しく書こ  
うと思つている。わたしはおしかさんの手箱の中には、丁汝昌の

秘文が蔵かくされていなく、ことはなからうと思つてゐる。

モルガンお雪の名は高かつたが、そのモルガンは、本国で恋に破れて来た痛手を、おしかさんによつて柔らかに撫なでてもらおうと祈つたのだつたが、そのころおしかさんは、故近衛篤磨このえあつまろ侯爵に思われていたおりなので、モルガンの願いはすげなくされた。異郷へ鬱うつを慰めに来た身が、またしても苦しい思いをして、彼れはせめてゆかりのある言葉を聞こうと、おしかさんのなまりとおなじことばで語る京都へいって、祇園ぎおんで名もなかつたお雪を受出したのだ。そういう張合はりあいはあつてもなくても、侯爵の思いようも一通りではなかつた。誰れでもおしかさんは別者べつものにして、近衛様のお側室そくしつさま格に思い、やがて呼迎えられる日のあること

を、遅かれ早かれ、約定済みのように傍の者も思っていたが、侯爵は思いもかけぬ病気で不意にこの世を去られた。

それからのおしかさんに、良い日のないではなかったが、最初にあまり良き人々に愛されすぎて、盛りがすぎてゆくとは反対に、誇りの方が高くばかりなっていた。後には長く紅葉館の支配人をしていた某氏と、殆ど<sup>ほん</sup>ど夫妻のように見られていたが、その人も死別してしまった。いまでは、昔はそういう人であったかと、若いものにおりおり顔を見直させるだけで朽ちてゆくとうとしている。

恋に生きた昔は知らず、得意な女と、失意の女とが、おなじ<sup>お</sup>起<sup>お</sup>伏<sup>きふ</sup>しのころのように、一人は踊り、一人は地を弾いて相向っている。

る――

須磨子夫人が昔をふりかえって、以前の友達にむかってもらしたという感想は、

「若かったから辛抱しられたのです。とてもいまじゃあ……」  
というのである。でも、知っているものは、そうでしょうとも  
いった。

若い心には、正直な一生懸命さがある。彼女も昨日までの華やかな世界を捨て、小禽ことりのようにおどおどとして舅姑しゅうとにつかえたのだろう。

大橋家は、もうその頃では有数の資産家として、書籍出版業と

しても第一の店となっていたが、父子ともに計つて富を一代に築きあげた、立志伝中の一家であつた。越後の寒村から出て来て、柳原河岸がしに古本の店を出していた時分は、いまだ時節が到来せず、かなりな苦境におち、赤貧のおりもあつたが、姑は良き妻、好き母であつて夫にも子にもその苦しみを訴えず、出来るかぎりを尽して働くものの口を糊のりした。それに励まされた父と子は、あれかこれかの末に、印税の入らぬ古い物語を集めて新らしく組み直して売り拵めた。時代の嗜好しこうに合した意外の成功に、次から次へと手を拵げて、当りつづけ、新しく戦争成金の続出のために、むかしからの資産家のように見なされてしまうように、幸運は何日も家の棟むねの上にいた。炯眼けいがんよく人世必要の機微をとらえ、学者、

文人、思想家を、店員なみに見なすような巨豪になったとはいえ、その成功はみな書物の貴さによつてだった。

姑は賢女だった。貧に暮した時を忘れず、傲りおごを警いましめて、かなり店が手広くなつてからでも、窮乏した昔を忘れなかった。店員のために蚊帳かやを買わねばならなかったが、金の都合で古い古いものを買つて来て、青い粉で蚊帳を染め、新らしいものらしく見せかけたが、古蚊帳も青く染つたかわりに、自分の手首もまっ青に染つてしまつてなかなかおちなかつたのを、それと見た若者たちが、わざと、どうしたのかと一々たずねて困らされた事などを、晩年になつても語りきかせていたということ、成功のかけには、こうした苦心もあるとの教訓も、華やかにくらしてきた、須磨子

さんには、苦しいものであつたらう。

ある人が、彼女の花の盛りから今日まで、親しく交わつての感慨に、彼女の美は衰えを知らぬのに、それにくらべて自分が男子として、碌々ろくろくと日を過して来たと嘆息して、

「七人の子をもてば大概の女の容色は萎むしぼものなのに、あの人は頸くびにも、耳の下のあたりにさえ、衰えをも見せていない」と言った。また、やはり昔から、久しく知っている人が、

「先日向うから自動車が来たので、ふと見ると、美しい人が乗っている。大橋令嬢かしらと思つて近づくとお母さんだった。お嫁にゆくほどの年頃の娘さんと、ふと見違えたといつても、間ちが



えるのが、決して無理ではない。」  
といった。それはほんとに過褒かほうではない。令嬢かほうたちはみんな美しくて上品だが、母君の持つ美しさには、ただ上品ばかりでない洗練されたものがある。

彼女の生立おいたちは——それは、ほんのすこしばかりしか知らない。余計な穿鑿せんさくだては入らないことと、強しいて探出さがしだそうとはしなかつたが、慥たしかな説に拠ると、上州で、かなり資産家の一人息子に父親は生れたらしい。その時代の頹廢たいはい派でもあったのか、生家ゆききは行来ゆききもせず、東京へ出て愛する者と共に住み、須磨子すまこを生ませたのだつた。



# 青空文庫情報

底本：「新編 近代美人伝（上）」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年11月18日第1刷発行

1993（平成5）年8月18日第4刷発行

底本の親本：「近代美人伝」サイレン社

1936（昭和11）年2月発行

初出：「婦人画報」

1920（大正9）年12月

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2007年4月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 大橋須磨子

長谷川時雨

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>